■阿佐谷の歴史（1850 年～現在　年表）

・阿佐谷の歴史を踏まえ、まちの成り立ちや、ここに暮らしてきた人々の営みとその変遷を読み解き、検討を行った。

阿佐谷の歴史

●1850～1890年代（江戸末期～明治期）

1850年代：阿佐ヶ谷村（武蔵国多摩郡）の農村地帯。畑作や養蚕が盛んで、静かな農村風景が広がる。

1878年(明治11年)：郡区町村編成法により東京府東多摩郡に属す。

1889年(明治22年)：市制町村制施行、「杉並村」に属する。

1889年(明治22年)：甲武鉄道（現・中央線）開通、中野～立川間が結ばれる。

初代村役場は「世尊院」の境内（開村時～1922年）

●1900～1910年代（明治後期～大正初期）

1906年(明治39年)：甲武鉄道が国有化、中央本線の一部になる。

1919年(大正8年)：都市計画法の制定により、阿佐谷周辺でも将来的な区画整理の制度的基盤が整う。

初期の杉並区役所

●1920～1930年代（大正末～昭和初期）

1921年(大正10年)：青梅街道に堀之内軌道（戦後の都電杉並線）が開通。1963年廃線。

1922年(大正11年)：阿佐ケ谷駅が開業。駅利用者が増加。

1923年(大正12年)：関東大震災後、住宅地として急速に展開。

1924年(大正13年)：現在の区役所の場所に庁舎を新築・移転する。

1930年代：作家・詩人・芸術家が集住、**「阿佐ヶ谷文士村」と呼ばれる文化圏**が誕生。
太宰治、井伏鱒二、與謝野晶子、山本有三らが暮らし、カフェや下宿が文学サロンのような場になる。

1932年(昭和7年)：杉並区が誕生（荻窪・和田堀内・井荻・高井戸の4町合併）。

昭初初期阿佐ケ谷駅北側から南を望む

1932 年 (昭和 7 年) 頃杉並役所と青梅街道

●1940年代（戦時期～戦後復興）

1945年(昭和20年)：駅周辺の商店街の西側を強制的に立ち退かせて更地化し、延焼を塞ぐ防火地帯に。

1945 年 (昭和 20 年) 阿佐ケ谷駅前強制疎開

杉並第一小学校の歴史

1875年(明治8年)
第一大学区東京府管内第三中学区第九番公立桃園学校第一番分校として開設（仮校舎：馬橋清見寺）
児童数：55名

1884年（明治17年）
現在地に新校舎を建築・移転

1902年（明治35年）
桃野尋常高等小学校に改称
児童数：1,959名

1910年（明治43年）
父兄懇談会・学芸会・展覧会を開催（以後毎年）
教室不足のため、8坪の校舎一棟増築

1925年（大正14年）
8月：杉並第一尋常高等小学校に改称、徽章制定
12月：仮校舎として使用していた天祖神社社務所を返却

1938年（昭和13年）
杉並第一尋常小学校に改称
児童数：1,008名

1947年（昭和22年）
杉並区立杉並第一小学校に改称

阿佐谷の歴史

●1950～1960年代（高度経済成長期）

1952年(昭和27年)：中杉通り（阿佐ケ谷駅南側）が開通。駅前整備が進む。

1953年（昭和28年）：地域住民の寄付による、119本のケヤキを植樹（現在約270本）

1953 年（昭和 28 年）、ケヤキ並木を植樹

●けやき並木のはじまり
阿佐谷のけやき並木は、戦時中の建物疎開によって生まれた防火地帯を活用した街づくりの中で誕生した。1945年の空襲で駅周辺や「けやき屋敷」が焼け、多くのけやきが失われましたが、一部が焼け残ったことから「この土地にはけやきが適している」と考えられた。
1953年に地域住民が寄付を集めて119本のけやき苗木を植樹し、復興の象徴として中杉通りの並木道が整えられた。

1954年(昭和29年)：第1回七夕まつり開催。

1962年(昭和37年)：東京メトロ丸ノ内線が荻窪まで延伸、阿佐谷エリアへのアクセスが飛躍的に向上。

1962年(昭和37年)：パールセンターアーケード（初代）の商店街が完成

1964年(昭和39年)：中央線（中野～荻窪間）が高架化、踏切が解消され、利便性・安全性がアップ。

1964年(昭和39年)：アニメ制作会社東京ムービーが阿佐谷に誕生。以降、阿佐谷を中心に制作や撮影を請け負う関連会社がいくつも設立され、杉並アニメ史の幕開けとなる。

1965年(昭和40年):行政地名の表記を住居表示実施に際し「阿佐谷」に統一。

映画館や劇場が複数立ち並び、大衆文化の発信地としてにぎわう。

1971 年 (昭和 46 年) 南から北を望む

●1970～1980年代

ジャズ喫茶やライブハウスが増え、音楽文化が根付く。

小劇場運動やアングラ演劇、漫画家・アニメーターの居住も目立ち、独自の文化圏を形成。

1981年(昭和56年)：中杉通り（北口側）が開通、駅北口の交通環境が改善。

1973 年 (昭和 48 年) 阿佐谷七夕まつり
※第 1 回は 1954 年 (昭和 29 年)

●1990年代

1993年(平成5年)：現杉並区役所庁舎完成、阿佐谷が区政の中心地となる。

1995年(平成7年)：**「阿佐谷ジャズストリート」**スタート。

七夕まつりも観光資源化、来場者が数十万人規模へ

1993 年 (平成 5 年) 現在の区役所落成

●2000～2010年代
古民家カフェや個人経営の雑貨店などが増え、多様な文化が混じる街へ。

2005年(平成17年)：アニメーションミュージアムが隣接する荻窪に開設。

2014年(平成26年)：**阿佐谷アニメストリート**開業（～2019年閉鎖）、サブカル拠点として話題に。

2019年(平成31年)：阿佐ケ谷駅北東地区まちづくり計画を制定

JAZZ ストリート 2017（平成 29 年）
※第 1 回は 1954 年 (平成 7 年)

●2020年代（現在進行形）

2020年(令和2年)：東京都市計画阿佐ヶ谷駅北東地区地区計画

2021年(令和3年)：杉並区がアニメ制作会社集積全国1位となる。(149社/811社中)

2022年(令和4年)：阿佐谷地域区民センターが阿佐谷けやき公園内に移転。
けやき公園プールが廃止に。

2023年(令和5年)：お笑い事務所タイタンが阿佐谷に移転。

2025年（令和7年）：河北総合病院が隣地に移転。

若者によるリノベーションカフェ・ギャラリーが続々オープン。

現在の阿佐ケ谷駅南側

杉並第一小学校の歴史

1957年（昭和32年）
RC造校舎への改築工事開始
（西校舎3階建てから順次改築）
児童数：1,140名

1965年（昭和40年）
RC造校舎改築進む、プール
整備完了
児童数：629名

1975年（昭和50年）
創立100周年、記念碑建立
児童数：690名

1977年（昭和52年）
児童数：710名

1992年（平成4年）
児童数：365名

2011年（平成23年）
耐震補強工事完了
児童数：422名

2025年（令和7年）
併設1施設移転改築工事設計着手
児童数：314名
創立150周年

■歴史まとめ①

・江戸時代の阿佐ヶ谷村に始まるこの地域は、文豪たちが集った「阿佐ヶ谷文士村」をはじめ、ジャズや映画、アニメなど多様な文化を育んできた。

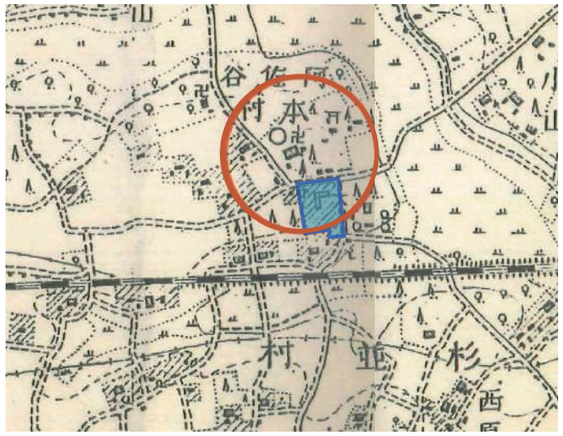
・また、地域住民の寄付による中杉通りのけやきの植樹、パールセンターの発展などに見られるように、住民主体の自発的なまちづくりが継続的に行われ、現在のまちの姿へと発展してきたことがうかがえる。

出展：　・「杉並区の歴史」杉並区公式ホームページ　https://www.city.suginami.tokyo.jp/s113/7392.html　・「あさがやまちづくりセッション第2回 配布資料」　・「杉並区立杉並第一小学校併設 1 施設移転改築工事」資料　・すぎなみ学倶楽部「アニメのまちができるまで」https://www.suginamigaku.org/corner/history/h-animation/
・中村建治（2021）『発掘写真で訪れる中野区・杉並区古地図散歩～明治・大正・昭和の街角～』株式会社シナノパブリシングプレス　・杉並区 区民生活管理課（2016）『戦後70年事業　区民の戦争戦災証言記録集』　・https://www.city.suginami.tokyo.jp/documents/5890/02-1_tokeishin209iken1_1-4.pdf

■阿佐谷の歴史（古地図）

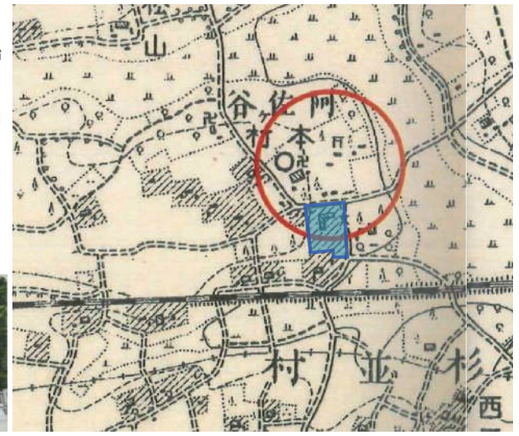
凡例　：検討対象地　：説明文の場所

明治 39 年の阿佐谷



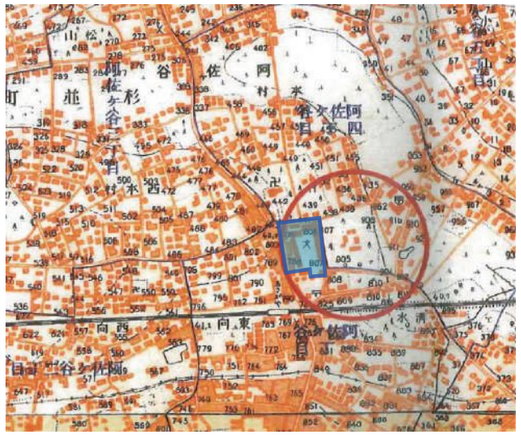
●阿佐ヶ谷村の鎮守「神明宮」
旧阿佐ヶ谷村の鎮守で、創祀は建久年間（1190 ～ 1198）頃とされる。始まりは、日本武尊が東征の帰途、阿佐ヶ谷の地で休息し、後に尊の武功を慕った村人が 1 社を建て「神明宮」を寄進したことからという。

大正 6 年の阿佐谷



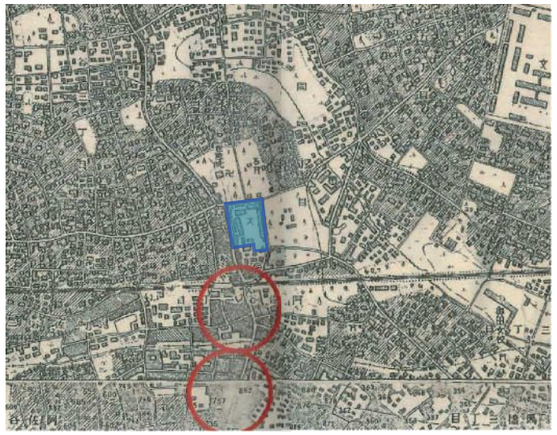
●杉並区の成立と世尊院の変遷
1889年、田端・馬橋・高円寺・成宗・阿佐ヶ谷・天沼の6カ村が合併して杉並村が誕生し、名称は青梅街道沿いの杉並木に由来する。**初代村役場は中央線北側の世尊院境内に置かれ**、明治から1922年まで使用された。1924年に杉並町となり、事務量の増加に伴い1926年に現在の区役所付近へ庁舎を新築移転、1932年には東京市杉並区となった。世尊院は1429年頃創建の古刹で、1977年の中杉通り建設により境内が分断され、本堂が移築されている。

昭和 5 年の阿佐谷



●河北総合病院とけやき屋敷
河北総合病院は、1928年に阿佐ケ谷駅近くで創立された地域密着型病院で、現在は353床を有し、健診・訪問看護・介護まで幅広い医療・福祉事業を展開している。
2025年には、**私有地であり地権者の長年の努力と負担によって維持され、駅周辺の貴重な緑地として親しまれてきた「けやき屋敷」へ、既存の緑を活かしながら移転。**

昭和 12 年の阿佐谷

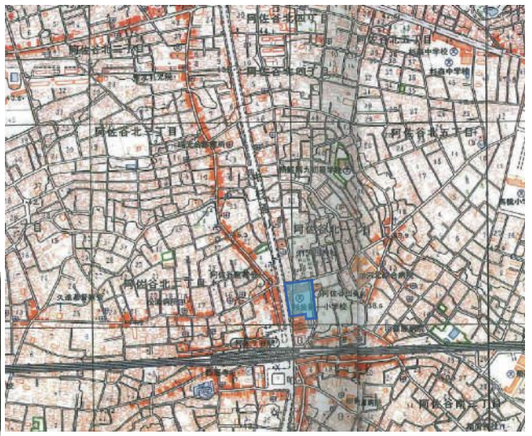


●子どものあそび場だったケヤキ並木の「中杉通り」
南阿佐ヶ谷の区役所前から練馬区貫井まで約5kmを結ぶ道路で「中野～杉並」を由来とする。戦前に計画されたが、戦時中の建物疎開で生じた空き地は戦後、子どもの遊び場として使われていた。**1954年に地元有志が募金で集めた約66,000円を区に提供し、ケヤキの苗119本を植樹した。**1981年に南北貫通して現在の姿となった。現在は都道427号瀬田貫井線として、ケヤキ並木が象徴的な幅20mの道路である。

昭和 31 年の阿佐谷

●色とりどりの「七夕まつり」
阿佐ケ谷駅南口の毎年8月に**パールセンターで開催**され、全長約700mのアーケードを商店ごとの工夫を凝らした飾りが彩る。1954年に、**夏の集客に悩む商店主たちが始めた祭り**で、当初は人出も少なかったが、1962年にアーケードが完成して以降、来場者が増加。現在では人気キャラクターや時事的な張りぼてなど多彩な装飾が特徴となり、5日間で約85万人を集める大規模な祭りへと発展した。

昭和 58 年の阿佐谷



●平日は快速停車、休日は静かな街
1969 年、総武線・東西線が中野～三鷹間で延伸・複々線化されたことで、杉並区民の鉄道利便性は大きく向上した。一方で国鉄は、総武・東西線が並行することを理由に、中央線快速を高円寺・阿佐ケ谷・西荻窪の 3 駅で通過させる計画を立てた。1961 年に、住民が高架化用地の確保に協力する代わりに「中央線快速を全駅停車させる」とする覚書が交わされていたため、地元はこれを約束違反として強く反対した。
その結果、「**平日は停車、土日・祝日のみ通過**」という妥協案で合意が成立する。

●鎌倉街道
鎌倉を起点に各地を結ぶ中世以来の古道の総称である。上道・中道・下道と称される三本の道筋で、区域に残る鎌倉街道は、中道から派生した道筋と見られる。

●阿佐ヶ谷道（鎌倉街道）
大宮八幡宮からは南西に鎌倉街道が延び、一之鳥居から北へ向かう道は斜面を下りながら阿佐谷へ続く【阿佐ヶ谷道】である。坂を下ると善福寺川にかかる橋を渡り、広い低地へと出る。現在は都立和田堀公園として整備され、和田堀池や釣り堀があり、豊かな自然が残されている。
街道はさらに北へ進み、松の木台地の坂を上る。左手には松ノ木遺跡があり、古墳時代の住居が復元された公園となっている。庚申塔を過ぎ、五日市街道を横切ると住宅街に入り、右手に梅里中央公園、その向かいに 1737 年建立の関口の地蔵尊が立つ。「関口」という地名も鎌倉街道に由来すると伝えられる。やがて道は青梅街道に突き当たり、これを渡ると「すずらん商店街」、さらに阿佐ケ谷駅前のアーケード街「阿佐谷パールセンター」へと続く。パールセンターもかつての鎌倉街道の道筋を受け継いでおり、途中の小さな十字路には江戸時代の庚申塔が残り、往時の面影を今に伝える。
現在の阿佐ケ谷駅周辺は商店街が立ち並ぶ賑やかなエリアだが、かつては鎌倉街道沿いに集落が点在していた。源義家が後三年の役の帰途に大宮八幡宮を参拝し、阿佐谷に宝仙寺を創建したという伝承からも、この道が古くから重要な交通路であったことがうかがえる。

■歴史まとめ②
検討対象地周辺は、古くから地域にとって重要な場所として位置づけられてきた。個人宅として維持されてきた通称「けやき屋敷」では、ケヤキの緑が今日まで継承されている。また、戦後に整備されたケヤキ並木や七夕祭りは、住民主体の自発的な投資と情熱によって実現したものであり、この地に根付く「自治の精神」がまちの個性を形づくっている。利便性よりも落ち着いた住環境を優先し、中央線快速が土日に通過となった経緯も、住民の主体性が都市形成に強く反映された象徴的な事例である。

出展：・中村建治（2021）『発掘写真で訪れる中野区・杉並区古地図散歩～明治・大正・昭和の街角～』株式会社シナノパブリシングプレス　・荻窪圭（2022）『古地図と地形図で発見！鎌倉街道 伝承を歩く』株式会社山川出版社

■1章まとめ

・１章において示した基礎条件の整理について、改めて整理を行う。

○まちづくり等の方針や計画について

まちづくりの方針等より、検討対象地には阿佐谷らしさを活かしながら①「駅前にふさわしいにぎわい拠点」②「イベントや災害時の防災拠点として利用できるオープンスペース」③「駐車場・駐輪場の整備」④「中杉通りのケヤキ並木と連続したみどりの空間」の整備が必要と考える。

また、産業商工会館については、検討対象地へ移転することが示されているため、それと合わせて産業振興センター等の集約も検討が必要と考える。

○法的条件リスト

検討対象地は阿佐ヶ谷駅北東地区地区計画区域内の中杉通り沿道地区に該当しており、建築する場合の制限があるため、検討の際には留意する必要がある。

また、水害ハザードマップより、検討対象地内は一部が浸水想定（0.1～0.5m未満）となっている。

○周辺施設マップ

阿佐谷エリアの特性と位置づけ

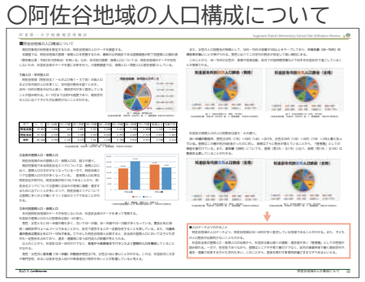
阿佐谷は、杉並区において「地域生活拠点」として位置づけられている。

①公共施設の集積： 阿佐ヶ谷駅を中心に、半径1km圏内に区役所、警察署、消防署などの行政・公共機能が集中しており、手続きや医療・福祉にアクセスしやすい環境が整っている。住民にとって身近に支援がある「安心感」を与える大きな強みとなっている。

②公共施設の老朽化： 駅周辺公共施設には築40から50年を経過している建物が多く、安全性への懸念も見られる。

③都市機能の不足： 高円寺や荻窪と比較し、まちを象徴する「特徴的なホール」や、駅前の人の交流やにぎわいを生むための「滞留できる広場」が不足している点が今後の検討課題である。

○阿佐谷地域の人口構成について



阿佐谷地域の人口データより、阿佐谷地域は30～40代が多く居住している地域であることがわかる。また、子どもの人口割合が比較的少ないこともわかる。

杉並区の昼間人口・夜間人口の比較から、杉並区は都心部への通勤・通学者が多い「住宅地」としての性格が読み取れる。一方で、住宅地でありながら、昼間はシニアや子育て層だけでなく、区内の事業所等で働く現役世代や、通学・通園で利用する子ども世代も多い。このことから、昼夜を問わず多世代が過ごすエリアであるといえる。

○阿佐谷の歴史

阿佐谷は、住民自らがまちの個性を形作ってきた歴史や、アニメや文士村、ジャズ、お笑いなど多様な文化的特徴を持つ。

①住民主体の緑の創造： 検討対象地周辺は、古くから地域にとって重要な場所として位置づけられてきた。個人宅として維持されてきた通称「けやき屋敷」では、ケヤキの緑が今日まで継承されている。また、中杉通りのケヤキ並木は、戦後の復興期に住民が寄付を募り、自ら119本の苗木を植樹したことから始まった。

②重層的な文化の醸成： 大正から昭和にかけた「阿佐ヶ谷文士村」は、阿佐谷の文化的土壌を形成し、1970年代以降のジャズや演劇、そして現代のアニメ産業やお笑い文化など多様な文化的要素が引き継がれている。

③にぎわいと伝統の共存：1954年に夏の集客対策として始まった「阿佐谷七夕まつり」は、商店主による手作りの巨大なはりぼてが特徴であり、現在では5日間で約85万人を動員する大規模な祭りへと発展。

④日常を支える商業文化： パールセンターをはじめとする活気ある商店街は、阿佐谷のにぎわいを生み出している。

■検討対象地の周辺環境まとめ

①多世代が過ごす住宅地：都心への通勤・通学者が多い一方、昼間もシニアや子育て層、区内就業者が集う。

②地域生活拠点：区役所・警察・消防などの行政機能が集中し、住民に身近に支援がある「安心感」を与える。

③公共施設の老朽化：築40～50年を経過する建物が多く、更新時期をむかえている。

④滞留空間の不足：高円寺・荻窪に比べ、象徴的な「ホール」や人が集える「広場」が不足している。

⑤「駅前にふさわしいにぎわい拠点」「イベントや災害時の防災拠点として利用できるオープンスペース」「駐車場・駐輪場の整備」「中杉通りのケヤキ並木と連続したみどりの空間」の整備が必要。

⑥歴史と文化：住民が主体となって地域の景観や文化を育て、地域の魅力や都市環境を形成してきた。このような住民主体の活動が、阿佐谷のまちづくりの基盤となっている。

⑦住民主体の緑の創造：中杉通りのケヤキ並木は、戦後、住民自らが寄付を募り植樹した歴史を持つ。

⑧重層的な文化の醸成：文士村から始まり、ジャズ、演劇、アニメ、お笑いなど多様な文化が引き継がれている。

⑨伝統とにぎわいの共存：「阿佐谷七夕まつり」「阿佐谷ジャズストリート」などの地域イベントや、活気ある商店街が、日常の賑わいを生んでいる。

■参考事例からみる整備機能の検討

・1 章（基礎条件の整理）を踏まえ、用途、駅近隣の立地などから、国内の類似の公共事業用地を活用した施設を参考として分析し、検討対象地に整備することが有効と考えられる機能を検討する。

大和市文化創造拠点シリウス

© 株式会社エスエス：加藤俊史

所在地	神奈川県大和市（大和駅前）
規模	地下 1 階　地上 6 階、26,003 ㎡
整備機能	図書館、芸術文化ホール、生涯学習施設、屋内こども広場を中心とした文化複合施設
竣工年	2016 年 7 月
事業主	大和駅東側第 4 地区市街地再開発組合 (大和市)
概要特徴	エントランスホールから書架が並ぶ全館が図書館の施設

事業概要	・「図書館」「芸術文化拠点」「生涯学習センター」「屋内こども広場」の 4 つの機能を中心とした文化施設。 ・多世代の居場所として、特定の目的がなくても立ち寄れる施設となっており、にぎわい創出の効果が見られる。以前は繁華街の印象が強かった駅前エリアが、施設整備を契機に環境が改善され、まちのイメージ向上につながっている。 ・やまとみらいまつり等のイベントでは阿波踊りや大道芸を実施している。一方で騒音に関する近隣からの意見もあり、対応を検討中である。
運営組織名	指定管理者やまとみらい　6 社 JV （株）図書館流通センター、サントリーパブリシティサービス（株）、（株）小学館集英社プロダクション、（株）明日香、（株）ボーネルンド、横浜ビルシステム（株） エリアやフロアにて担当を分担。
運営状況	【メインホール】：稼働率 90% / 日 (ミュージカル、日本舞踊、クラシック音楽等の演奏会まで様々な演目に対応。) 【サブホール】： 稼働率 100% / 日 (座席を収納し、平土間形式でも利用可能。小規模の演奏会や講座など。) 【1 階 ギャラリー】：展示やワークショップスペースとして利用されている。 【2 階 市民交流ラウンジ】：土日は稼働率 100%(料金は 1 人あたり 1 時間 100 円で利用可能。有線 LAN や電源、専用の印刷スペースも備えており、セカンドオフィスとして活用できる。) 【3 階保育室】：稼働率 98%(保育士が常駐し、最大 4 時間まで子どもを預かる。料金は 500 円 /1 時間。) 【3 階げんきっこ広場、ちびっこ広場】: 夏季冬季、雨天時は稼働率 100%(定員 75 組 5 クール交代の運用。料金は、子ども 200 円 /1 クール 105 分、大人 300 円 /1 日（市外は +100 円)、ちびっこ広場は親子で無料) 【5 階 読書室】：土日は稼働率 100%(3 クール交代。77 席あり無料。静かな環境で読書ができる。) 【6 階 講習室・文化創造室】：稼働率 60% (自主事業を年間約 70 件実施。) 【6 階 市民交流スペース】：218 席あり無料。休憩、勉強等に利用されており、施設内で最も利用されている。
防災機能	・帰宅困難者対策として約 1,400 名分の備蓄を有し、市の危機管理担当と定期的に連絡会を実施している。 ・市役所本庁舎の第 2 防災拠点に指定されており、自家発電設備を備えている。
概略プラン検討の参考ポイント	・2 階市民交流ラウンジや 6 階市民交流スペース等の多世代が利用できる居場所空間が施設全体に点在する点に加え、図書館と居場所空間を一体的に構成している点は、概略プランの検討において参考となる。 ・平土間形式で多用途に利用できるサブホールは、様々なイベントや会食等の地域需要に応える参考ポイントとなる。

※記載内容は、現地調査および関係者への聞き取りをもとに整理したものです。

整備機能

ホール機能	・メインホール：客席数最大 1007 席（1 階 795 席、2 階 212 席） ・サブホール：客席数最大 272 席　約 8,300 ㎡
図書・学習機能	約 6,500 ㎡
交流機能	約 4,000 ㎡
芸術・展示機能	約 300 ㎡（ギャラリー）
業務・管理機能ほか	約 4,000 ㎡＋B1 駐車場　普通車 58 台 , 自転車 196 台 , バイク (125cc 超)15 台 ,(125cc 以下)36 台

※各機能の面積はパンフレットから大まかに求積した数値です。

6 階　仲間と集い学ぶ 生涯学習センター

・市民交流スペース
・講習室
・大会議室
・中会議室
・小会議室
・和室
・調理実習室
・文化創造室
・印刷室
・大和市役所図書・学び課

© 株式会社エスエス：加藤俊史

© 株式会社エスエス：加藤俊史

5 階　調べて学ぶ 図書館

・レファレンスカウンター
・情報検索コーナー
・地域資料コーナー
・読書室
・点字図書室
・対面朗読室

© 株式会社エスエス：加藤俊史

© 株式会社エスエス：加藤俊史

4 階　くつろぎながら本に親しむ 健康都市図書館

・健康コーナー
・健康テラス
・健康見える化コーナー
・メインカウンター
・予約本コーナー
・ティーンズコーナー
・まんが・新聞・雑誌コーナー
・シアターブース
・読書テラス

© 株式会社エスエス：加藤俊史

© 株式会社エスエス：加藤俊史

3 階　思い切り遊んで学ぶ 大和こどもの国

・げんきっこ広場
・ちびっこ広場
・保育室　・相談室
・こども図書館
・こども読書室
・スタジオ
・赤ちゃんの駅
（授乳室、オムツ替室）
・多目的室
・こどもシアターブース
・おはなしのへや
・マルチスペース

© 株式会社エスエス：加藤俊史

© 株式会社エスエス：加藤俊史

2 階　楽しく語り集う 市民交流のフロア

・市民交流ラウンジ
・図書館大和市役所大和連絡書
・大和市イベント観光協会
・コインロッカー

© 株式会社エスエス：加藤俊史

1 階　感動が生まれる 感性と創造の場

・メインホール
・サブホール
・ギャラリー
・総合案内
・図書館
・授乳室
・カフェ
・放送スタジオ

© 株式会社エスエス：加藤俊史

© 株式会社エスエス：加藤俊史

© 株式会社エスエス：加藤俊史

■参考事例からみる整備機能の検討

ウェスタ川越

提供：ウェスタ川越

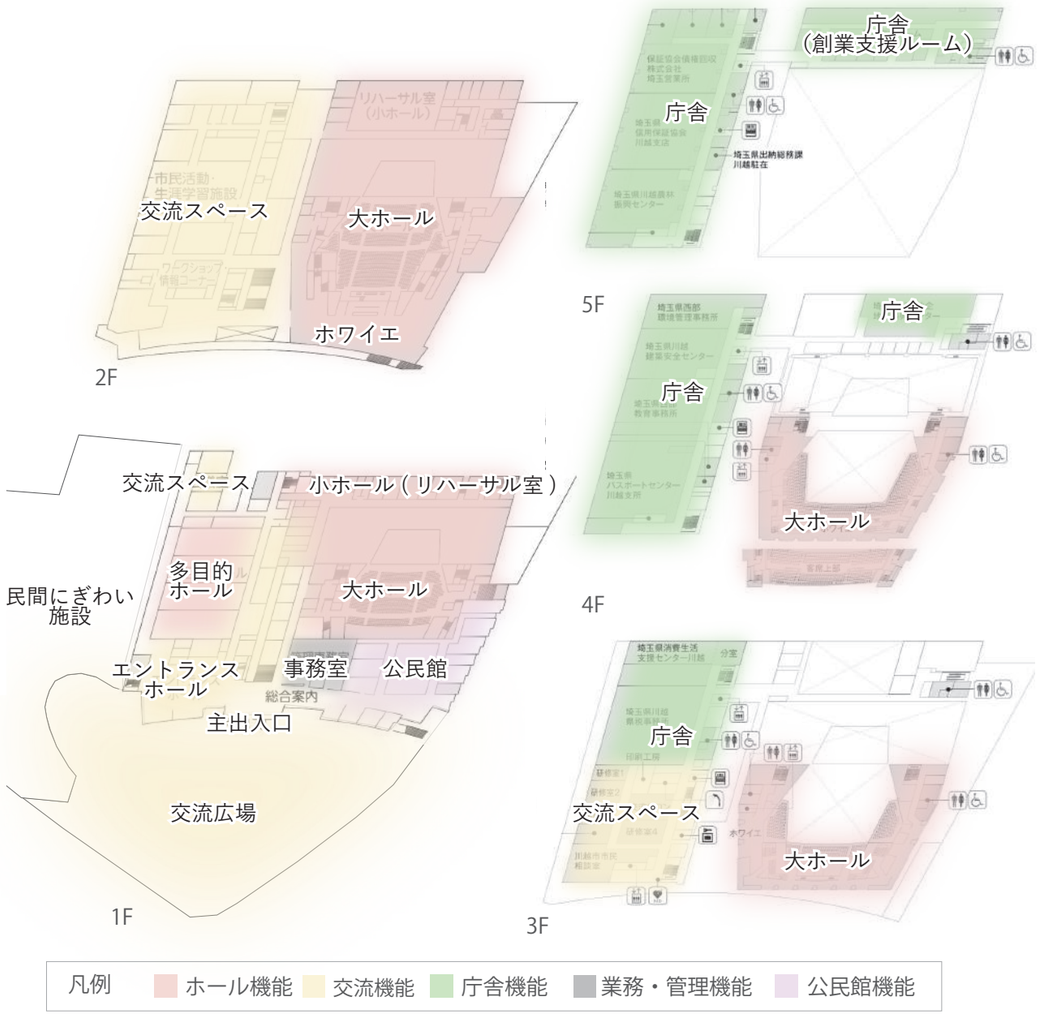
所在地	埼玉県川越市（川越駅前）
規模	地下 2 階　地上 6 階、40,211 ㎡
整備機能	多目的ホール、創業支援施設、生涯学習施設、地方庁舎などの複合施設
竣工年	2015 年 3 月
事業主	埼玉県、川越市
概要・特徴	県及び市の公共施設と隣接する民間事業者によるにぎわい施設を一体整備

事業概要	・川越駅周辺の回遊性向上、公共サービスの充実、にぎわい創出を同時に図るため、県と市が同一敷地内で一体的に整備した施設である。 ・駅前拠点形成の観点から、公的機能と民間商業機能を隣接配置し、集客力と回遊性の向上、地域経済の活性化を目指している。民間事業者は、公募・提案審査を通じて、提案内容や運営計画を総合的に評価し選定された。 ・計画立案から設計・整備にかけて、説明会や個別協議等を通じて住民意見を聴取し、議会での議論を踏まえながら計画の調整・改善が行われた。 ・複合施設においては、来館者動線と職員動線の分離や出入口制御等により、利便性とセキュリティの両立を図っている。
運営組織名	指定管理者：NeCST（ネクスト）　3 社 JV 日本環境マネジメント（株）：総括、清掃、警備 （株）コングレ：施設運営、（株）NTT ファシリティーズ：維持管理
運営状況	【大ホール】：稼働率 90%（22.5 万人 / 年） 【小ホール (リハーサル室)】：稼働率 90%（3.5 万人 / 年）220 ㎡、座席のみ 150 席程度 【多目的ホール】：稼働率 95%（10 万人 / 年）4 区画計 650 ㎡ 企業イベント、講演、学校利用、立食パーティーなどで利用。 立食パーティー時には 2 区画使用することが多い。配膳室は約 20 ㎡。ケータリングサービスの準備室として使用。 【3 階 男女共同参画推進施設 (交流サロン・研修室)】：稼働率 70%(各種講座実施のほか、市民同士での活動場所としてヨガやウォーキング講座、学校行事等に使用。中高生の居場所としても開放。) 【5 階 創業支援ルーム】：創業 3 年目までのスタートアップを支援。1 名～ 3 名用の貸オフィス 26 室。打合せ室あり。専門アドバイザー常駐（3 名交代） 【交流広場】：ほぼ毎週末イベントや、ファーマーズマーケットを開催。規模は 3000 人～ 2 万人程度。
防災機能	帰宅困難者対応として川越駅利用者 2 万人、3 日間程度を備蓄（川越市）。1 階のホールや、2 階の市民活動施設、3 階研修室等での対応を想定している。
概略プラン検討の参考ポイント	・駅前立地を生かし、駅からの動線を意識した配置や誰でも立ち寄りやすい開放的な空間構成とする計画や、ホール機能と庁舎機能が一体的に構成されていることで、来庁者とイベント来場者など異なる利用者層が施設内で交わり、日常的なにぎわいを創出している点は、概略プラン検討において参考となる。 ・民間と行政が連携・融合する施設構成により、行政サービスと商業・交流機能が相互に利用者を呼び込み、施設全体の利用促進やにぎわい創出につながっている点は参考となる。 ・規模感や運営状況に加え、多目的ホールは、イベントや講習会、ケータリングなど多様な用途に対応できる点が参考となる。

整備機能

ホール機能	・大ホール：客席数 1,712 席（1 階 982 席、2 階 154 席、3 階 576 席） ・小ホール（リハーサル室）：220 ㎡ ・多目的ホール：約 650 ㎡（可動間仕切りにより、1/4 の大きさ（約 160 ㎡）から利用可能）　スクール形式（3 名掛け）約 300 名、シアター形式約 780 名、立食パーティー形式約 400 名
庁舎機能	約 10,000 ㎡
交流機能	約 5,000 ㎡
業務・管理機能 ほか	約 5,000 ㎡ ＋ B1・B2 駐車場 204 台　自転車 193 台、125cc 以下の原動機付自転車 17 台

※各機能の面積はパンフレットから大まかに求積した数値です。



提供：ウェスタ川越

※記載内容は、現地調査および関係者への聞き取りをもとに整理したものです。

■参考事例からみる整備機能の検討

大宮区役所・大宮図書館

提供：さいたま市

所在地	埼玉県さいたま市大宮区
規模	地下 1 階　地上 6 階、23,542 ㎡
整備機能	庁舎、図書館、駐車場
竣工年	2019 年 3 月
事業主	大宮クロスポイント （発注者：さいたま市）
概要・特徴	庁舎機能と図書機能が一体となった市民の日常に開かれた拠点

整備機能

図書館機能	約 4,400 ㎡
庁舎機能	約 10,000 ㎡
交流機能	約 3,400 ㎡
業務・管理機能ほか	駐車場：89 台　(B1) 駐輪場 自転車：117 台（地上）　バイク：20 台（地上）

※各機能の面積はパンフレットから大まかに求積した数値です。

※平面図の色分けは、大宮区役所の案内パンフレットに掲載されているものをそのまま使用しております。 提供：さいたま市

事業概要	・老朽化や耐震性能、環境負荷等の問題を抱える大宮区役所と同じく、老朽化し、機能更新が必要となった大宮図書館を合築複合施設として旧埼玉県合同庁舎敷地に整備。 ・市民の交流空間を創出するふれあいスペースを設け、大宮の新たなシンボルとして賑わいを創出。 ・旧埼玉県大宮合同庁舎の解体と新庁舎の設計・建設に加え、その後約 20 年間の維持管理や、図書館・総合案内・カフェ・コンビニ等の運営までを一体的に民間に委ねる PFI 事業として実施している。これにより、公共サービスの質の向上と、さいたま市の財政負担の縮減を図っている。事業期間は、平成 28 年から令和 21 年までの約 23 年間（設計・建設 3 年＋維持管理・運営 20 年）である。 ・事業者は埼玉県大宮合同庁舎を解体のうえ、計画地に施設の設計、建設を行った後、本市に所有権を移転し、事業期間中において維持管理・運営業務を実施する、いわゆる BTO 方式（Build Transfer Operate）により事業を実施する。 ・指定管理業務：新大宮図書館運営業務、1 階 (多目的室、展示スペース、氷川のひろば等) 運営業務、什器備品保守管理業務 ・建物周辺に広場空間を設けることで周辺と一体的な環境をつくるとともに、ガイダンスステップとステップリビングが吹き抜けを介して連続するスパイラル状のオープン空間を形成。上下階の気配を感じられる開放的な構成により交流を促し、1 階の賑わいと上層階の静けさが緩やかにつながる憩いの場を生み出す。
運営組織名	SPC（特定目的会社）名称 : 大宮クロスポイント（株） 代表企業 : 大成建設㈱ 構成員 : 東京ビジネスサービス㈱、㈱図書館流通センター、㈱小学館集英社プロダクション、㈱佐伯工務店、柏木建設㈱、毎日興業㈱、アシマ㈱ 協力会社 : ㈱久米設計、シーラカンスケイアンドエイチ㈱、コクヨマーケティング㈱
防災機能	・非常時に区役所は防災中核拠点となり、区災害対策本部を設置し災害対策方針を決定していくとともに、各避難所との情報連絡中継拠点、防災資機材等の備蓄拠点、支援物資の拠点としての機能役割を担う。 ・大宮図書館は一時滞在施設に指定されており、フリースペース部分に帰宅困難者を受け入れる計画としている。 ・非常用発電機の設置により非常用電源を確保するとともに、緊急用排水貯留槽を設けるなど、電気・上下水道断絶時の 72 時間の機能維持を確保。地域防災計画に基づく拠点備蓄倉庫を設置し、飲料水・食糧・生活必需品を確保する。
概略プラン検討の参考ポイント	・氷川参道などの恵まれた周辺環境を活かした計画は、神明宮と建築、ケヤキ並木との関係性を検討する上で参考参考となる。 ・吹き抜けの階段（ステップリビング）や、参道の緑を感じられるテラス席など、「目的がなくても立ち寄れ、長時間滞在したくなる居場所」の創出やシームレスな「行政・民間・図書」の動線計画が参考になる。 ・PFI（BTO 方式）を活用し、民間の資金・ノウハウを導入することで、複合公共施設を効率的に整備・運営している。

※記載内容は、HP 等の資料より調査し、整理したものです。

■参考事例からみる整備機能の検討

	TOYAMA キラリ	茨木市文化・子育て複合施設　おにクル	アンフォーレ安城
	提供：富山市立図書館	©ナカサアンドパートナーズ	提供：安城市
所在地	富山県富山市	大阪府茨木市（茨木駅前）	愛知県安城市（安城駅　徒歩 5 分）
規模	地下 1 階　地上 10 階、26,792 m^2	地上 7 階、19,715 m^2	地下 1 階　地上 5 階（本館）、地上 2 階（南館）、9,274 ㎡
用途	図書館・美術館・銀行・店舗	ホール・図書館・子育て支援施設など	図書館・ホール（本館）、商業施設（南館）
竣工年	2015 年 5 月	2023 年 11 月	2017 年 4 月
事業主	富山市	茨木市	安城市
概要・特徴	吹抜けを中心として、北側の図書館と南側の美術館を融合させた施設	茨木市市民会館の跡地活用、市内に分散していた機能を集約した施設	図書館等の公共施設と民間経営の商業施設等の複合施設
参考要素	吹抜けを介した居場所の形成手法や、吹抜けを中心として各階の機能を融合している点、図書館機能とその他機能の共存のあり方は、本計画を検討する上で参考となる。	近隣の施設老朽化・分散を踏まえ老朽化施設を集約して再編する案 2 の参考となる。建物を「立体的な公園」とし、吹き抜けやテラスで回遊性を生んだ構成は、案 1 ～ 3 に共通して参考となる。	図書館機能と多様な機能の共存は案 1・2 において、また、居場所となる屋外広場・公園空間の整備や民間収益施設との複合化によるにぎわい創出は、本計画の検討において参考となる。

	キャロットタワー	須賀川市民交流センター tette	アオーレ長岡
	提供：世田谷区	提供：須賀川市	写真使用なし
所在地	東京都世田谷区	福島県須賀川市	新潟県長岡市（長岡駅前）
規模	地下 5 階　地上 27 階　塔屋 1 階、76,754 ㎡	地上 5 階、13,698 ㎡	地下 1 階　地上 4 階、35,485 ㎡
用途	事務所・劇場・店舗・駅駐車場	図書館・生涯学習支援・子育て支援施設	アリーナ・ホール・市役所・市議会議場
竣工年	1996 年 11 月	2018 年 8 月	2011 年 11 月
事業主	三軒茶屋太子堂四丁目地区市街地再開発組合（世田谷区）	須賀川市	長岡市
概要・特徴	レンガ調の外観で住宅街と調和し、駅直結でオフィス、商業、ホール、行政機能を集約した複合施設。	スラブをずらして重ね、多様な活動がシームレスに交差する複合施設	アリーナ、屋根付き広場、市役所が一体となった全国初の複合型施設
参考要素	駅前における利便性の高い公共機能（行政窓口やホール）の配置、や展望ロビー等の開放による集客・回遊性の創出が、駅周辺整備における「賑わいと利便性の両立」のモデルとして参考となる。	図書館、子育て支援、生涯学習空間が、吹き抜けやテラスを介して多世代をシームレスにつなぐ点は案 1 の検討において、また施設全体で多様な居場所が形成されている点は全案共通で参考となる。	駅前立地という点で本計画と共通しており、「ナカドマ」による全天候型空間での賑わい創出は案 1～3 に、行政機能との連携のあり方は案 3 において参考となる。

■参考施設共通の特徴　　複合化によって生まれた大きなオープンスペースによるにぎわいの創出や多世代の居場所づくり、災害時の安全な居場所、立体的なみどりを取り入れる環境が共通点として挙げられる。

■区民意見の分析

本検討対象地の跡地活用について、杉並区により区民意見聴取の取り組みが行われた。本業務では、区が聴取した意見を分析し、跡地に求められる整備機能を検討する。

①区民参加ワークショップの意見の分析

杉並区が実施した区民参加ワークショップ「あさがやまちづくりセッション第 8 回」の区民意見を分析し、跡地に求められる整備機能を検討する。

あさがやまちづくりセッション第 8 回の概要
「杉並第一小学校移転後の跡地活用のアイデアを考えよう」をテーマに、前半・後半の 2 日間にわたって開催。
(開催場所：阿佐谷地域区民センター　第 1・2・3 集会室)
【前半】令和 7 年 9 月 20 日 (土)　参加者 40 名
【後半】令和 7 年 10 月 26 日 (日)　参加者 31 名

①-1 跡地活用の方法に関する区民の意見には、単なる公共施設の建て替えに留まらず、阿佐谷の歴史や文化を継承すること、そして次世代を育む「多機能な交流拠点」等のアイデアがみられた。
主な意見を以下の 5 つの視点でまとめる。

1.「にぎわいと交流」を生む開かれた空間
多機能な交流拠点として、多世代・多国籍な人々が交差する居場所づくりが求められている。
〇交流の仕掛け： 子どもから高齢者まで特定の目的がなくても気軽に立ち寄れる居場所、イベントで活用できる開放的な広場や発表ができるホール、「ゆとりある空間」「ゆるやかな交流」「憩いの場」などの意見もみられた。
〇アクセスの改善： JR 阿佐ヶ谷駅北口からのアクセス向上やバス乗場の整備など、高齢者や障害者にも優しいユニバーサルデザインの徹底。
〇スタートアップ支援：阿佐谷での起業や新たな活動を後押しする場として、起業希望者や地域で活動を始めたい人を支援する機能が求められている。

2.「みどりの保全と創出」による景観の継承
中杉通りのケヤキ並木との連続性を重視し、「みどり」を感じさせる空間づくりが求められている。
〇みどりのネットワーク： 神明宮や周辺の緑地をつなぎ、散策や休息ができる「緑の回廊」の形成。
〇環境との調和： 屋上緑化や全天候型の森、100 年後を見据えた自然循環型の街づくり。既存木の保存を望む声もみられた。

3.「文化・教育・学び」の創造拠点
阿佐谷独自の文士村、ジャズ、アニメといった文化的土壌を活かした機能が強く望まれている。
〇多様な文化活動： 楽器やダンスの練習ができるスタジオ、展示が可能なスペースの設置。
〇知の拠点： 周辺の既存図書館機能の移転や拡充、カフェや自習スペースを併せ持つ「武蔵野プレイス」のような、「滞在型図書館」への期待。
〇子どもの成長: 放課後に安心して過ごせる居場所や､中高生が気兼ねなく集まれる｢ゆう杉並｣のような機能、学びと遊びが融合した屋内型の子どもの居場所の設置。

4.「防災・安全性」の向上
駅近の広大な土地を活かし、災害に強い安全なまちづくりの要としての役割が期待されている。
〇避難・救援機能： 水害や地震、火災時に安全に避難できる場所、また帰宅困難者を受け入れるための広場や備蓄、一時滞在機能の整備。
〇災害への備え：日常的な施設利用に加え、「災害時にも活用できる機能」「緊急時電源の整備」「防災の模擬体験を行い、災害に備える心を育てる」などの意見も見られた。

5. 暮らしを支える「ウェルネス・福祉」
心身の健康を支え、孤立を防ぐコミュニティ機能の充実も大きなテーマとなっている。
〇子育て・福祉支援： 子ども食堂や心の悩み室等の子育て支援機能に加え、障害者や外国人などマイノリティも利用しやすいインクルーシブな環境が望まれている。
〇健康増進：猛暑でも利用できる屋内プールや体育館などの提案に加え、病院との連携も望まれる。

①-2 まちの将来像に関する区民の意見には、安全や安心、文化やにぎわいなどの阿佐谷らしさを「未来につないでいく」といった意見がみられた。
主な意見を以下の 3 つの視点でまとめる。

1.「ここに来れば、ひとまず安心」といえる安全なまち
災害時や防犯の拠点として機能することに加えて、地域住民にとって安全で魅力的な場所であり、地域の人々が自然と見守られる、「安心して暮らせるまち」が望まれている。

2. 阿佐谷の文化やにぎわいが循環するまち
人が入れ替わっても、今の阿佐谷の「文化を未来につないでいく」ことで、阿佐谷の文化を継承する。
また、高齢者から若者へ、多世代がかかわり合える場を通じて、にぎわいが未来へと続いていくまちが望まれている。

3. 時代の変化を取り込み、選ばれ続けるまち
時代が変わっても多世代の人々が集まる持続可能なまちとして、新しく流入する住民を含めてつながっていく、愛されるまちが望まれている。

■ 区民意見のまとめ①
〇 跡地活用に関する意見
区民の意見に共通しているのは、「目的がなくても居られる場所」であり、かつ「阿佐谷ならではの個性が感じられる場所」にしたいという願いである。行政主導の効率的な施設運営に加え、民間との連携や自由度の高い広場、そして「学び」と「憩い」が共存する場が求められている。中杉通りのケヤキ並木との連続性を重視し、みどりが豊かな環境の中でこれからの阿佐谷地域の 100 年を支える「阿佐谷のシンボル・にぎわいのまち」としての拠点の構築が期待されている。
〇 将来像に関する意見
区民の将来像に関する意見としては、今の阿佐谷の文化やにぎわいが、時代が変わり住民が変わってもつながって続いてほしいという想いが共通している。また安心して暮らし続けられるまちという意見も多く見られた。

■区民意見の分析

②個別聴取した区民意見の分析

杉並区が個別に意見聴取を行った、阿佐谷地区の町会や自治会、関係団体等の区民意見を分析し、跡地に求められる整備機能を検討する。（杉並区の意見聴取実施期間：令和 7 年 7 月から 11 月）

阿佐谷地区の町会・自治会長、周辺施設・関係団体等の意見を整理した。
全体として、「利便性の向上」「防災力の強化」「多世代が交流できるコミュニティ機能」を求める声が強く、単なる箱モノではなく、阿佐谷の街の特性（商店街、文化、医療）を活かした施設が期待されている。

1. 行政機能・公共サービス（利便性の向上）
駅前という好立地を活かし、住民が移動せずに済む「ワンストップサービス」への期待が高い。
〇区役所や行政機能の移転･集約： 区役所の一部機能、年金事務所、法務局、運転免許更新センターなどの誘致。
〇阿佐谷図書館の移転： 老朽化施設の更新として、駅前への移転を要望する声。
〇オンライン連携： 南阿佐ヶ谷駅の区役所本庁舎とオンラインで繋ぎ、手続きが完結する仕組み。

2. 子育て・医療・福祉（安心の基盤）
駅前での「子育て・医療および福祉施設」の設置を求める意見が出ている。
〇病児・病後児保育の充実： 登園・出勤の流れで立ち寄れる利便性と、近隣医療機関（河北総合病院等）とのスムーズな連携。
〇高齢者支援： 今後の高齢化を見据え、高齢者が集い、必要なサービスを受けられる機能。

3. 文化・にぎわい・イベント（地域の活性化）
阿佐谷らしい文化を継続・発展させるためのスペースが求められている。
〇多目的ホール･集会室： ケータリングが可能（地元の商店街からの調達）な施設。荻窪のタウンセブンホールのようなイメージ。
〇広場の確保： イベントや日常的な憩いの場としての公園・広場機能。
〇コミュニティカフェ： 誰もが立ち寄れる「ちょっとした交流スペース」。

4. 防災・インフラ（安全な街づくり）
「防災」について地域では、跡地利用の根幹として避難所として活用できる等の共有された認識がある。
〇防災拠点機能： 災害時の備蓄倉庫、一時避難場所としての活用。
〇浸水対策： 近年の大雨による駅周辺の浸水を防ぐための地下貯留施設などのインフラ整備。
〇駐輪場・駐車場の整備： 買い物客や通勤者のための十分な駐車・駐輪スペース。

5. みどり・都市デザイン・景観（街の調和）
阿佐谷のシンボルである中杉通りの景観や、歴史ある阿佐ヶ谷神明宮との調和が重視されている。
〇緑のネットワーク： 中杉通りのケヤキ並木とつながるような緑化。
〇まちとの調和：周辺環境に配慮した計画。
〇回遊性の向上： 商店街との連携を強める導線設計。

■ 区民意見のまとめ②
阿佐ヶ谷駅前の好立地を活かし、「行政サービスの利便性向上」と「防災機能の強化」「阿佐谷らしい文化の継続、発展」を求める声が強く、病児保育やホールの設置、図書館の移転、商店街との連携なども期待されている。景観や神明宮との調和を保ちつつ、駐車・駐輪場等のインフラも完備した、多世代が安心して集い、地域の活力となる複合拠点の形成が望まれる。

■2 章まとめ 整備することが有効な機能について

・2 章において示した整備機能の検討事項について、改めて整理を行う。

○参考事例

①滞在型施設の形成：大和市「シリウス」施設全体に点在する多世代が利用できる居場所空間や、「茨木市文化･子育て複合施設　おにクル」や「須賀川市民交流センター tette」の「立体的な公園」のような空間構成は、多世代が交流する居場所づくりに参考となる。特定の目的がなくとも自然に集える場は阿佐谷にも重要である。

②周辺環境との融合：「大宮区役所・大宮図書館」のように周囲の緑を「借景」として活用する設計は、圧迫感を抑えつつ地域景観と調和を図るための有効な手法である。検討対象地においても中杉通りのケヤキ並木や神明宮の杜を建築の一部として取り込む視点が重要であると考えられる。

③行政機能との融合： 店舗などの民間施設と一体となって整備されている「ウェスタ川越」「大宮区役所・大宮図書館」の事例に見られる公共と民間の相互補完は、駅周辺の回遊性向上や地域の活性化に大きく寄与するための取組として参考となる。検討対象地においても行政サービスに知・文化・民間機能を融合させ、利便性と賑わいを最大化することが考えられる。

④防災拠点の充実：「茨木市文化・子育て複合施設おにクル」や「アオーレ長岡」のように、駅前の広大な敷地特性を活かし、日常の賑わいと災害時の救援機能を両立させ、防災を「日常の安全基盤」として組み込むことは参考となる。

○区民意見の分析

①居場所の創出： 単なる施設利用を超え、目的がなくても過ごせる「多世代の居場所」や、カフェや学習スペースを併せ持つ「滞在型図書館」の整備が強く望まれている。

②みどりのネットワーク形成： 中杉通りのケヤキ並木や阿佐ヶ谷神明宮の杜と連続性を持たせ、歩行者が休息できる「緑の回廊」としての整備が期待されている。

③にぎわいと交流の創出： 七夕まつりやジャズストリート等の地域イベントと連携できる開放的な広場やホールの整備とともに、多世代･多国籍な人々が交差する仕組みづくりが求められている。

④防災機能とインフラの強化： 災害時の帰宅困難者支援などを受け入れる広場や備蓄、一時滞在場所の機能が求められている。

⑤暮らしを支える公共サービス： 行政機能の集約による利便性向上（ワンストップサービス）や、病児・病後児保育などの子育て支援、近隣医療機関との連携も重要視されている。

■検討対象地において整備することが有効と考えられる機能のキーワード

・1 章、2 章のまとめから検討対象地において整備することが有効と考えられる機能を具体的に検討する。

①【にぎわい・居場所の創出】**特定の目的がなくても立ち寄れる場を作ることで、阿佐谷らしい多様な人々が交差するにぎわいを生み出す。**

○多世代が交流する居場所：目的がなくても過ごせる「多世代の居場所」を設ける。

○滞在型図書館：単なる本の貸出にとどまらず、ブックカフェやラウンジ、自習スペースを併設し、区民が日常的に長時間滞在できる場を設ける。

○全天候型の開放的な広場：七夕まつりやジャズストリート等のイベント会場としても機能し、日常的には誰もが休息できる屋根付きの屋外・半屋外空間（オープンスペース）を設ける。

○多目的ホール：発表会・講演会が可能な自由度の高い集会・交流機能を整備する。地元の商店街と連携したケータリング利用にも対応可能とする。

○子どもの居場所：子育て支援施設に加え、中高生が安心して過ごせる「子どもたちが利用する施設」や「子育てサポート施設」を設ける。

○リフレッシュ施設：20 代～30 代の居住者（単身の居住者を含む）が多いため、一人でも気兼ねなく過ごせる静かな**「ブックカフェ」**や**「ラウンジ」**、ストレスを解消することができる**「リフレッシュ施設」**が有効と考える。

②【みどりの継承】**住民自らが植え、守り育ててきた中杉通りのケヤキ並木や、阿佐ヶ谷神明宮の豊かな緑を施設内に引き込む。**

○周辺環境を活かした空間設計： 大宮区役所の事例に見られるように、中杉通りのケヤキ並木を建物内から感じられるテラスや散策路を整備し、地域の恵まれた周辺環境を取り込む。

○神明宮・けやき屋敷との景観調和： 貴重な緑地である神明宮や「けやき屋敷」との連続性を重視する。圧迫感を抑えた緑豊かな植栽計画とする。

③【文化の継承】**「阿佐ヶ谷文士村」以来の文化的特性、ジャズ・演劇やお笑い、アニメ制作会社が多いなどの多様な文化的要素を次世代へつなぐため、機能整備を図る。**

○多機能スタジオ・展示スペース： 楽器練習、ダンス、表現活動が可能なスタジオや地域の歴史、アニメ文化や地域住民の創作活動を展示するスペースを設ける。

○ホール：地域の文化イベントの拠点となり、お笑いのイベント会場としても利用可能な機能を設ける。

④【安全の基盤】**地域の中心的な場所に、安心・安全の拠点を設け、日常の利便性と緊急時の安全性を両立させる。**

○避難・防災拠点：自家発電設備、数日分の備蓄機能を備える。ホールなど大人数が入れる機能を有効活用し、帰宅困難者や一時避難者を多世代で受け入れられる機能を構築する。また、近隣で発生した水害にも対応する機能を想定する。

⑤【暮らしの支え】**駅至近の立地を生かし、日常生活の利便性向上を目指した行政サービスを提供する。**

○行政機能の集約と高度化： 区役所の一部機能の移転や様々な行政機関とのオンライン連携を検討し、住民が移動せずに手続きを完結できる「ワンストップ」での窓口サービスを提供する。

○子育て・ウェルネス支援： 病児・病後児保育施設を設置し、河北総合病院などの近隣医療機関とスムーズに連携できる機能を導入する。